「殺生釘」付きの蔵を見たことがありますか

中尾 仁彦 さん　箱館歴史散歩の会主宰、第１回 函館検定 上級試験合格、ＮＨＫラジオ「どどんと道南ラジオ」に月１回レギュラー出演中。

ふだん上を向いて歩いていなければなかなか気が付きませんが、屋根の端に陽炎（かげろう）のようなトゲトゲのある鬼瓦のある蔵を（写真１）見たことがありますか？鬼瓦・鬼板の上に、5 ～ 15 本程度の釘状の金属が放射状に付けられ、これを「殺生釘（せっしょうくぎ）」と呼ばれることが多いそうです。

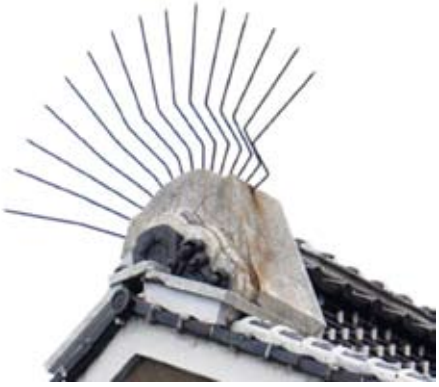

写真１ 殺生釘（せっしょうくぎ）

函館には多くの蔵が存在しますが、すべてに付いているわけではなく、大手町の函館国際ホテル向かい、若松町の五号線付近（写真 2）および大森町のホテル函館ロイヤル向かいのわずか３例のみです。全国的にも付いていることのほうが非常に珍しいため、函館国際ホテルの宿泊客から「あれはなんと呼ぶの、目的は？」と職員が尋ねられることが珍しいことではありません。

殺生釘は「陽炎」とか「からす」とも呼ばれますが、地方によっては名前が付いていない方が多く、実は函館も特定の名前で呼ばれていないのです。

その目的は①魔除けや装飾②鳥が鬼瓦に巣を作ったり、フンを付けたりすることを防止すると言われています。むしろ形状から判断すると、蔵の建築主の財力の一端を誇示することの方が強いのかも知れません。曲線を持ちながらも天に向って伸びる釘が、なんとも誇らしげではないでしょうか。事実、京都あたりでは明治から第一次大戦の好景気の頃流行ったそうです。

写真２ 若松町の蔵

全国でも 100 例足らずといわれ、その分布の範囲は、大脇潔（「殺生釘補遺」2008 年）によると、西は京都・奈良から北海道までと東に偏在することも明らかのようで、時期は、江戸時代から明治・大正・昭和にかけて流行したとしています。

一方、大阪以西では全く見かけず、鬼瓦や鬼板の上から前方に突き出る円筒形の瓦である鳥衾（とりぶすま）付鬼瓦（写真 3）の独り舞台です。

栃木県栃木市、千葉県香取市（旧佐原市）と共に小江戸と呼ばれる埼玉県川越市は、江戸黒の蔵造り店舗が軒を並べ、年間通して観光客でにぎわっています。その中で殺生釘を持つ蔵の和菓子の「くらづくり本舗」は、隣にそびえ立つ青緑色ドームの洋風建築「埼玉りそな銀行 川越支店（旧第八十五銀行）」と対照的な建物のため、その存在は異彩を放っています。蔵の多い川越市でさえこの１例のみで、函館と同様に「殺生釘」などの特定名称では呼ばれていません。

明治 25 年に函館の川瀬善一が編著した「青森明細絵図」によれば、現在の青森駅付近の繁華街に殺生釘の蔵が 10 棟も存在する稀有な町でした。しかしその後の大火や空襲により惜しむらくはまったく現存していません。

恐らく函館の現存 3 例は、全国的には多い方の町なのです。ご存知のように明治元年から昭和 9 年まで、函館は 100 戸以上焼失の大火が驚くなかれ 26 回もあった大火の町です。そのため「火除け」の意味合いが極めて強いのではと私は推測します。

このように「殺生釘」がどうして付いているのか、さらにその目的はなどまだまだ謎だらけが実態なのです。

さあ皆さんも上を向いて歩きましょう！　新しいトゲトゲのある鬼瓦がもっと見つかるかもしれません。

写真３　鳥衾（とりぶすま）

写真 1,2 提供 大西 剛